

永田 千鶴

熊本大学大学院生命科学研究部 准教授

“エイジング・イン・プレイス”を果たす居住形態別認知症高齢者ケアモデルの開発

本研究により、ケアモデル小規模多機能事業所編九州版、および関西版、ケアモデル特別養護老人ホーム編、ケアモデルグループホーム編の作成を行った。その結果、以下の示唆が得られた。

第一に、ケアモデル小規模多機能事業所編九州版と関西版の作成により、地域性は明らかにならなかった。しかし、小規模多機能事業所が圏域内の利用者にサービスを提供するようになれば、自然と地域に根ざしていくと認識された。

第二に、4つのケアモデル作成により、課題に、【24時間医療ニーズに対応する】が共通して挙げられた。今後は、より医療ニーズに対応できる体制が期待される。

第三に、【多機能をいかして暮らしや看取りを支える】【自宅を暮らしの拠点として支える】【認知症高齢者に向き合う】は、小規模多機能事業所独自の概念である。

第四に、小規模多機能事業所独自の概念と特別養護老人ホーム、および認知症高齢者グループホームで抽出された【利用者・家族の立場に立つ】【自然な看取りを実践する】【協働する体制を整える】【看取りの評価をする】【職員の資質を向上させる】を相互にいかすことが重要である。

第五に、「ケアモデル特別養護老人ホーム編」では【地域に密着して活動する】は抽出されないが、利用者がもつ地域とのつながりを保持することが重要である。